

北村季吟『枕草子春曙抄』の改訂版出版について

山崎 正伸

架蔵の浜臣・夏蔭説書入『枕草紙春曙抄』（以下、春曙抄と呼称する）と、成田修一氏蔵の浜臣書入『八代集抄』『拾遺集』（以下、拾遺集抄と呼称する）について報告し、併せて、泊泊舎での会読について報告しようと調査を始めた。しかし、季吟の春曙抄の本文とその改訂に、整理しなければならない問題が生じたので、本稿では春曙抄の改訂版出版について私論を述べたい。

架蔵の春曙抄は、袋綴じ六冊本（第一冊一・二、第二冊三・四、第三冊五・六、第四冊七・八、第五冊九・十、第六冊十一・十二）と、袋綴じ十三冊本である。前者には、その所蔵者三輪義方の筆で、一冊目右下に、「共六本」とあり、三輪義方所蔵の段階で既に表紙・題簽を初めとする改装本である。後者は、紺色紙表紙、縦二十五・八糎、横十八・九糎、枠付き縦十八・六糎横四・四糎「枕草子春曙抄一」とする刷り題簽が左肩に貼られている。この十二冊に、壺井義知の「枕草子装束抄」に門人の多田義俊の考案を付した『枕草子装束撮要抄』（以下、装束抄と呼称する）一冊が加わっている。奥付には、

皇都 四條通京極西入町

享保十四年己酉卯月下旬 上坂勘兵衛源兼勝發梓

とある。享保十四年（一七二九）に、十三冊本となったものか。この両者には、冊数のことと、装束抄の有無以外にも若干の違いがある。このことについては、既に野村貴次氏にご研究¹があるので、氏の考察に則って説明しよう。氏は以下のように、

	所 在	甲 本	乙 本
1	発端一才三行目	「五人のひと也」の下部空白。	その部分に、「天曆五年梨壺にて能宣元輔順時文望城等後撰をえらへり」と二行割りに入木せり。
2	春曙三―七ウ・ 頭注一八行目・ 二二行目	「イニ御供にて人丸かとあり。此事不審也拾遺二人丸へ足ひきの山路もしらす白樫の枝にも葉にも雪のふれゝはとあり此哥の事にや」とあるうち二箇所訂正している。	「イニ御供にて人丸かとあり。此草子第一の秘訣也拾遺二人丸へ足ひきの山路もしらす白樫の枝にも葉にも雪のふれゝはとあり此段可愛 ^{ママ} 師伝」と埋め木で改めている。
3	春曙三―九才頭 注二〇行目	「圓機活法二云。」として「相鶴經云」と続けている。	「圓機活法二云。」の六文字を抜き空白としている。
4	春曙三―一六才 傍注一行目	「形ナリとよむ」と本文「なりなど」の横に注がしてある。	「形ナリとよむ」の六文字を抜く。

と、四箇所の異同によって甲本と乙本と二区分にされている。この事例に加えて、荒滝雅俊氏は、野村氏の甲本と乙本の区分と、季吟の跋文に捺されている印の違い、

A「慮菴」（縦・横二・五纏の方印、朱印）

雲英末雄氏蔵「延宝九年卯月十六日季吟筆『花林園記』」にもある。(同氏著『元禄京都俳壇研究』に写真掲載。勉誠社、昭和60年4月刊)

B (文字不明) (縦二・四×横二・一纏、朱印)

それほど早いとは思われない刷りの本に捺されてある。季吟がこの印を使用していたという確証はない。次の表の10・11のように、異同2が修正される以前の段階でA印のないものがあることは、その時点で頒布が季吟以外のものに委ねられた可能性が考えられよう。季吟以外のものの印のように思われる。

と、A・B朱印の区別とその有無を加え、野村氏の前表に合わせて、次の一覧表を作成され、

所 属	型 冊	装 丁	1 2 3 4	異 同	印	所 属	型 冊	装 丁	1 2 3 4	異 同	印
1 神宮文庫	大12	原装	甲甲甲甲		無	9 加賀文庫	大4	原装	乙甲乙乙		A
2 野村氏甲本	大4	原装	甲甲甲甲		A	10 神宮文庫	大12	原装	乙甲乙乙		無
3 大和屋文庫	大4	原装	甲甲甲甲		A	11 初雁文庫	大12	原装	乙甲乙乙		無
4 岩崎美隆本	? 4	?	甲甲甲甲		?	12 野村氏乙本	大6	改装	乙乙乙乙		?
5 学習院日文	大6	原装	甲甲乙乙		A	13 早大図書館	大12	原装	乙乙乙乙		B
6 同右	大12	原装	甲甲乙乙		A	14 三手今井	大6	原装	乙乙乙乙		無
7 金沢図稼堂	大12	原装	乙甲乙乙		A	15 大阪女子大	大6	原装	乙乙乙乙		無
8 本居記念館	大12	原装	乙甲乙乙		A	16 都立中央図	大12	原装	乙乙乙乙		無

表の2以下の諸本は基本的には同板本であるが、ただ5以下の諸本は修正が加えられた板木によっていると見てよい。

2・9 (4は未詳) にあるA印であるが、(中略) 季吟が実際に使用していた印であることは明らかである。先ずは、

この印のあるものが季吟によつて頒布されたとみなしてよいであろう。現存するもので、A印が捺されており、初刷本に最も近いと考えられるものとなると、表に示した2・3が該当し、全て四冊本である^③とされる。そして、注で、この外に、神宮文庫蔵本と大和屋文庫蔵本とを比較して、

巻一・発端一丁目表の内題「春曙抄」の「春」の字形が明らかに違う。巻三・廿八丁目裏では、白抜き丸が黒丸となっている。巻四・十二丁目裏の3行目にある「袖ぎちやう」の傍注で、神宮文庫蔵本では「栄花物語にも有詞也」を省略する。巻六・二丁目表の4行目末の「奉」の振り仮名「たてまつ」が神宮文庫蔵本では省略される。巻六・五丁目裏の3、5行目神宮文庫蔵本に濁点が省かれている箇所がある。巻三・九丁目裏、十八丁目表、巻九・七丁目表、巻十一・廿二丁目裏などでは、文字が枠内にあるものとそうでないものの違いがある^④。

と指摘される。朱印A印とB印であるが、不明とされるB印については、早稲田大学蔵に捺されたと思われる写真版が三七頁に掲載されており、同印と認められるものが、佐賀県立図書館蔵本にも捺されており、「五齊」と読める。しかしながら、この「五齊」が、酒の五つ濃度の種類の意、泛齊・醴齊・盎齊・緹齊・沈齊の五齊と号するのだから、余程の酒豪か酒好きに違いないと興味は湧くのだが、誰のものであるかは調べられていない。本文の違いについては、字体についてまで上げると、「有」「也」など細かな違いが多々あり、また、白抜き丸と黒丸についても、他の箇所にも見られ、かつ、マイクロなどで確認が不十分となるため、今回の調査対象から外して、振り仮名と文字のあるなしに絞ると、

①春曙四―一二ウ三行目傍注 「袖几帳栄花物語にも有詞也」の「栄花物語にも有詞也」の増補

②春曙抄六―二才四行目文末 「しげいしやは見奉」の「奉」^{たてまつ}の振り仮名の有無

この二箇所が荒滝氏の指摘の確認箇所となろう。先ず、野村氏が指摘されている1・4を、架蔵本で見ると、六冊本は甲本に当たり、十三冊本は乙本に当たる。但し、十三冊本は、五・六巻を欠くため、国文学資料館のマイクロで、同一の版と考えられる中田光子氏所蔵本(32ナ3・16・1・1)によつて、五・六巻を補完して、全十二冊に渡って確認すると、他に、

以下の十一箇所に相違点が見られた。

	所在	架蔵02本（甲本）	架蔵03本と32（乙本）
①	発端一才三行目	集の撰者利壺 ^{ナシツホ} の五人のひとり也	集の撰者梨壺 ^{ナシツホ} の五人のひとり也
②	発端三才七行目	安貞二季 ^年 三月	安貞 季 ^年 三月
③	春曙二―一四才	源氏総角に。宇治の中君に匂宮	源氏総角に。宇治の中君 ^{ナカノ} に匂宮
④	頭注六行目 春曙三―七才・ 頭注一二行目・ 一八	のきぬぐくに。 それしも葉かへせぬ椎の木をし もとの心也〱いつとなく葉がへ ぬ山の椎柴に人の心をなすよし もかな 堀河次郎百首に仲實の 哥也猶古哥尋ぬへし さはきてたるも 此詞亦可勘 紅梅は十一月より二月迄	のきぬぐくに。 それしも葉かへせぬ椎の木をしも との心也〱いつとなく葉がへぬ山の椎 柴に人の心をなすよしもかな〱箸鷹 のとかへる山の椎柴の葉かへはすと も君はかへせじ さはきてたるも 髪さばきたる也ては助字也 紅梅は十一月より二月 ^{マデ} 迄
⑤	春曙三―廿三才		
⑥	頭注五行目 春曙六―二ウ		
⑦	頭注四行目 春曙六―二ウ		
⑧	頭注十三行目 春曙七―二十才 頭注一行目	されど紅梅は紅に重ては (空白)	されど紅梅は紅に重 ^{カサネ} ては うと濱駿河舞也袖中抄に有

この十七箇所の違いから、大まかに、冊数と装束抄の有無、發一ノ一の有無やその位置関係の違いを除いても、改めて、別の区分けを必要とするのではないかと推測される。改めて、以下の作業のための十七の確認箇所と朱印についての確認基準をまとめると、

6	5	4	3	2	1	
2				1		野村氏
						荒滝氏
						山崎
④	③	②		①		
春曙二―一四才 頭注六行目	春曙二―一四才頭注六行目	発端三才七行目	発端一才三行目	発端一才三行目		
春曙三―七ウ頭注一八行目 〓二二行目						
						甲／ナシ／○
						利壺 ^{ナシツボ}
						空白
						○安貞二季三月 ^{〔年〕}
						ナシ（中君）
						堀河次郎百首に仲實の哥也猶古哥 尋ぬへし
						イニ御供にて人丸かとあり。此事不 審也拾遺二人丸〓足ひきの山路も
						乙／アリ／×
						梨壺 ^{ナシツボ}
						梨壺五人の割注
						×安貞 季三月 ^{〔年〕}
						アリ（中君 ^{ナカノ} ）
						〓箸鷹のとかへる山の椎柴の葉かへは すとも君はかへせじ
						イニ御供にて人丸かとあり。此草子第一 の秘訣也拾遺二人丸〓足ひきの山路も

番	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
										4	3
◎							㊦	㊧			
	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥			⑤		
	春曙十二―廿四ウ	春曙十二―廿二才頭注一七行目	春曙十二―廿一ウ頭注八行目	春曙十一―一四才四行目脇注	春曙七―二十才頭注一行目	春曙六―二ウ頭注一三行目	春曙六―二ウ頭注四行目	春曙抄六―二才四行目文末	春曙四―一二ウ三行目傍注	春曙三―廿三才頭注五行目	春曙三―九才頭注二〇行目 春曙三―一六才傍注一行目
	A「慮菴」・B「五齊」とその有無	ナシ(制し)	きぬひのせぬひ	○一条禅閣説	空白	ナシ(重ては)	ナシ(二月迄)	ナシ(見奉)	几帳	此詞亦可勘	しらす白櫨の枝にも葉にも雪のふれゝはとあり此哥の事にや 圓機活法三云ク。相鶴經三云ク。 形ナリとよむ なりなど
		ナシ(制し)	きぬ のせぬひ	× 条禅閣説 (空白)	うと濱駿河舞也袖中抄に有	アリ(重ては) (カサネ)	アリ(二月迄) (マデ)	アリ(見奉) (たてまつ)	几帳栄花物語にも有詞也	髪さばきたる也ては助字也	しらす白櫨の枝にも葉にも雪のふれゝ はとあり此段可受師伝 空白 相鶴經三云ク。 空白 なりなど

となり、以上の十八について、大和屋文庫本と架蔵二本、国文学研究資料館蔵二本と国文学研究資料館に納められているマ
イクロフィルムから三十四本、計三九本を調査した。その結果は一覧として論文末に付したので参照願いたい。

扱、以上の三九本の調査の結果（巻末一覽）から、項目3と15の×印の板本を除いてここに掲出すると、

No.	所蔵	形態・冊	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	印
01	大和屋文庫本	大4	甲	甲	○	アリ	甲	甲	甲	甲	甲	甲	アリ	アリ	アリ	甲	○	甲	アリ	A
06	三原図	大6	甲	甲	○	ナシ	甲	甲	甲	甲	乙	甲	ナシ	ナシ	ナシ	甲	○	甲	ナシ	無
08	北海学園北駕	大12	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無
09	大倉精神研	大12	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無
16	金沢図稼堂	大12	乙	乙	○	アリ	甲	甲	乙	乙	甲	甲	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	A
18	白杵図 三門和一光	大6	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無
19	学習院日語日文五〇三	大6	乙	甲	○	アリ	甲	甲	乙	乙	甲	甲	アリ	アリ	アリ	甲	○	甲	アリ	A
20	学習院日語日文五〇二	大12	乙	甲	○	アリ	甲	甲	乙	乙	甲	甲	アリ	アリ	アリ	甲	○	甲	アリ	A
25	青森県図工藤	大12	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無
29	神宮文庫 一七〇	大12	乙	乙	○	アリ	甲	甲	乙	乙	甲	甲	アリ	アリ	アリ	甲	○	乙	アリ	無
31	佐賀県図	大12	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	B
35	三手今井似閑	大6	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無
36	宣長記念	大12	乙	乙	○	アリ	甲	甲	乙	乙	甲	甲	アリ	アリ	アリ	甲	○	乙	アリ	A
37	筑波大図	大6	乙	乙	○	アリ	乙	乙	乙	乙	乙	乙	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無
39	国文研初雁	大12	乙	乙	○	アリ	甲	甲	乙	乙	甲	甲	アリ	アリ	アリ	乙	○	乙	アリ	無

となる。この十五本の中での大きな特徴は、06の振り仮名の有無であろう。「中君」「重ては」読み難いものとして付加されたものであり、「迄」「制し」も読み辛い字体である。そして、「奉」は、春曙抄三—十八ウ七行目「え見え奉らぬ」の「奉」

には振り仮名がなく、かつ、字体も明確である。春曙抄六——二才四行目の「奉」は「東」の草書体に近く、ちなみに、『くずし解読字典』では、右肩に*印が付いていて、使用上好ましくない字例と同一である。読み間違いへの配慮と推量される。これらの事例は、削除する理由もなく、この形の物こそが、最初の春曙抄ではあるまいか。十二冊本ではないが、四冊本の前の形であり、野村氏が指摘される延宝九年四月二十五日付けの観音寺（西川朝舜）宛書簡の「貴礼拝見御無事御座候哉大慶奉存候春曙合巻之儀御尤奉存候即四冊^③申付候近日出来次第進上可申候^④」と四冊に合巻したもの以前の春曙抄と考えると良いのでは無からうか。この六冊本の^⑤06から四冊本の^⑥01へと、西川氏の意見を採り入れての四冊合巻と読みの配慮が成されたものと推測するのである。

次には、^⑦01から^⑧19・^⑨20と考えられる。共に季吟の朱印Aが捺されており、1の「利壺」から「梨壺」への誤字訂正と、7の「圓機活法ニ云ク。」の削除と、8の「形ナリとよむ」の削除である。7は、寛文十二年（一六七二）刊の『円機活法』に拠った孫引きであろうが、「圓機活法ニ云ク。」という書名の重複を訂したもので、8は、頭注との重複を訂したものであろう。

次は、同じく季吟の朱印が捺されている^⑩36で、2の梨壺五人の割注の付加と16の「きぬひのせぬひ」の「きぬ のせぬひ」と「ひ」を削った訂正である。2の「天曆五年梨壺にて能宣元輔順時文望城等後撰をえらへり」を入木したのは、天和二年（一六八二）五月刊の『八代集抄』と無関係ではあるまい。後撰集の末尾に「自延寶七年霜月十八日至八年庚申二月廿二日^⑪註解^⑫早 季吟」とある延宝七年（一六七九）頃かもしれない。^⑬29は、全く同一の版で朱印がないものである。

その次と推定されるものが、^⑭16である。これには14の「うとはまうたひ」の注に、「うと濱駿河舞也袖中抄に有」と入木している。5の甲の注に「堀河次郎百首に仲實の哥也猶古哥尋ぬへし」とある古歌に関わって、定家の歌より古い例を意識したのであろう。「うどはま」は『後拾遺和歌集』一一七四番歌にあり、八代集抄では、

うどはまにあまの 童蒙抄云、昔するがの国の有度浜に神女の天くだりて舞しをうつして今の世にはするが舞とて東遊

にする也 愚案けふの祝子ハフリコの舞も其世の如しと也

と『童蒙抄』を引くが、『童蒙抄』では第六の「祝」にあつて、指定しづらく、且つ、古歌も判りにくい。『袖中抄』では、

○ウドハマ

ウドハマニアマノハゴロモムカシキテフリケムソデヤケフノハフリコ

顯昭云 昔スルガノ国ノウドハマニ神女ノアマクダリテマヒシヲ 野叟ヤソウノマネビツタヘテマフヲ イマハスルガマ

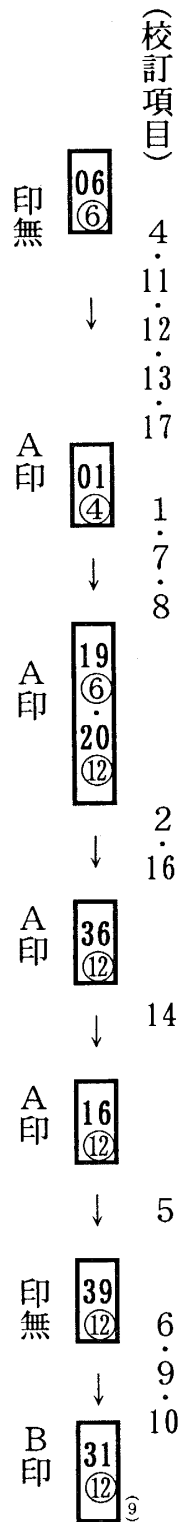
ヒトテ アツマアソビニスルハ是ナリオキナ

とあつて、七の二〇丁表頭注の空白には、良い選択と推量される。ちなみに、八代集抄の後拾遺集には、「自延寶八年二月廿三日至同年五月廿日解解早 季吟」とある。

[16]との違いが見られるのが、朱印は無いが、[39]の国文学研究資料館の初雁文庫蔵本である。これには、十二巻後表紙裏に「享和三年（一八〇三）四月廿九日茂語先生以藏本校合之畢 久陳」とあつて、茂語先生（横田袋翁）の蔵本と本文校合したものである。この本に見られる違いは、5の「それしも葉かへせぬ 椎の木をしもとの心也」いつとなく葉がへぬ山の椎柴に人の心をなすよしもかな 堀河次郎百首に仲實の哥也猶古哥尋ぬへし」とある引き歌が、永久四年（一一一六）十二月二十日成立の『永久百首』であつて、この時より古い引き歌を見いだそうとしたことを示唆する。それが、「それしも葉かへせぬ 椎の木をしもとの心也」いつとなく葉がへぬ山の椎柴に人の心をなすよしもかな 箸鷹のとかへる山の椎柴の葉かへはすとも君はかへせじ」と、『拾遺和歌集』の一二三〇番歌を引く、八代集抄の拾遺集には、「延寶七年己未八月三日是抄書之初日也同年霜月五月十八日終功功早 北村季吟」とある。この[39]と同一で朱印のあるものを見つけてはいないので、先後関係のみであるが、ここあたりまでが、季吟による校訂増補ということになるうか。

[31]には、朱印Bが捺されている。この春曙抄には、6・9・10の三箇所が増補されている。6は、「イニ御供にて人丸か」とあり。此事不審也拾遺二人丸へ足ひきの山路もしらす白檜の枝にも葉にも雪のふれはとあり此哥の事にや」が「イニ御供に

て人丸かとあり。此草子第一の秘訣也拾遺二人丸、足ひきの山路もしらす白樫の枝にも葉にも雪のふれ、はとあり此段可受師伝」と変わっており、「可受師伝」ということからすれば、北村湖春（慶安元年（二六四八）—元禄十年（二六九七））か、あるいは、別の弟子による増補と考えられよう。9は、頭注の「さはきてたるも」に「此詞亦可勘」とあったものが、「髪さばきたる也ては助字也」と新たな解釈を施している。10は、「袖ぎちやう」の「ぎちやう」漢字で「几帳」と当てていた物に「几帳栄花物語にも有詞也」と『栄花物語』『楚王の夢』に事例があることを付加したもので、これまでの振り仮名の追加や誤字の訂正とは違って、春曙抄そのものを改めて読み込んだ結果と思われるものである。この朱印Bについては、前述したように「五齊」と読めるが、誰のものかは不明である。ここまでの校訂経過を図示すると、



となる。次に、海賊版と思われるものについて簡単に触れてみよう。これは、大きく分けて三つに分割されと思われる。一つが、最初の06から派生したもの、もう一つが31から派生したもの、そして、この両者が干渉したと思われるものである。06から派生したものは、15の「一条禅閣」の「一」を削った02⑥・05⑫・11⑫・23⑫・28⑫・30⑫である。この形態で振り仮名がないものは、1・2・7・9が乙に変更されている12と、3が削られた04・07・10と、これに5・6が乙に変更された26がある。12には、十二巻廿四丁裏に続いて、廿五丁から装束抄が十七丁あって、その裏に「寛政元年己戌年初冬」とある。04は、12と同じ装束抄を別冊にして、十二巻廿四丁に続いて、「青藜閣發兌目録江戸東叡山池之端仲町須原屋伊八版」と目録が四丁あって、後表紙裏が図1となっている。この版は、3が「安貞 季三月」と、年号が削られている。同じ装束抄に一七丁裏が図2となっている外、十二巻廿四丁の後に「山金堂蔵板書籍本石町十軒店目録山崎金兵衛」が三丁付く26は、5と6を乙に変更している。この寛政元年の装束抄が附属する12・26の二種と、12から派生した須原屋伊八版という分類が出来ようか。

伊勢物語傍注	二冊	袖珍加奈遣	一枚摺
徒れく草傍注	二冊	同 増 補	
同 諺解	五冊	装束拾葉抄	二冊
寛政六甲寅年七月購版			
東叡山池之端仲町			
江都書林			
同町 須原屋伊八			
高橋與惣治			

図 1

清少納言枕草紙装束撮要抄 ^終	〈装束抄〉
寛政元年己戌初冬	〈十七〉
本石町通十軒店	
山崎金兵衛梓	

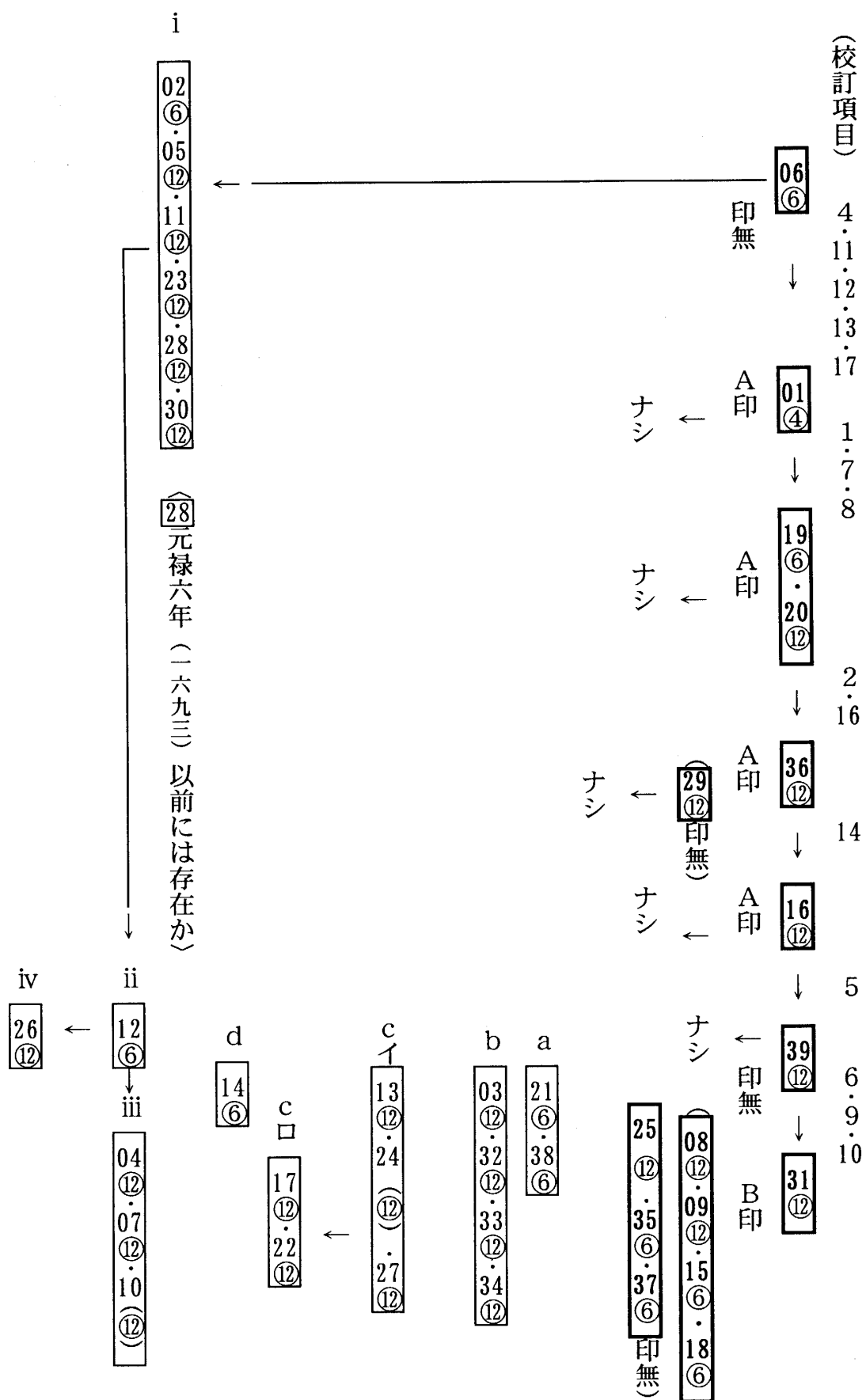
図 2

[31]から派生したものとしては、全く同一で朱印が無いものを除いて、これに近くて、15の一箇所が「^(空白)条禅閣説」のもの[21]・[38]、また、同じく一箇所、3が「安貞 季三月」^(軍)となっているもの[03]・[32]・[33]・[34]、3は「安貞二季三月」^(軍)となっているが、14が空白で15が「^(空白)条禅閣説」の[13]・[24]・[27]と、発端部分を欠いている[17]・[22]、3と15が空白で10が補訂されていない[14]がある。

以上のように六次の校訂が認められ、また多くの海賊版を生んだ春曙抄であるが、それぞれの発刊年次を明確にすることはできない。しかし、15が「^(空白)条禅閣説」となる初版の春曙抄と推測するものの海賊版である[28]の十二巻後表紙裏に

奉納 枕草子春曙抄 一部十二巻 元禄六年癸酉九月吉日 京清水新右衛門常之

とあることからすると、このような海賊版が北村季吟・湖春の生前に存在していたということになる。別に紹介する清水浜臣と前田夏蔭の説を中心とした泊泊舎の注が書き込まれた春曙抄^⑩は、この版と同じものの改装本である。



注

- (1) 野村貴次『季吟本への道のり』（新典社 昭和五八・三）六八九・六九〇頁
- (2) 「北村季吟著『枕草子春曙抄』の刊行年について」（『解釋學』第十輯 平成五・十二）二九頁下
- (3) (2)の三〇・三一頁
- (4) (2)の三四頁下の注7
- (5) 若尾俊平・服部大超著（柏書房 一九七六年）七九頁
- (6) (1)の六七三頁
- (7) ゴチック数字に□印は、所蔵本を表す。01④は、大和屋文庫蔵・四冊本、以下同。
- (8) 橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』（笠間書院 昭和六〇・二）四七九頁
- (9) ○数字は、冊数を表す。06⑥は、06三原図書館蔵・六冊本、以下同。
- (10) 拙稿「架蔵『枕草子春曙抄』の清水浜臣注について」（『東洋学研究所集刊』第34集（二松學舎大学東洋学研究所 二〇〇四・三）

野村實次 荒滝雅俊 山崎正伸	天和屋	天4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
01	天和屋	天4	①	1	②	③	④	2	3	4	⑤	.	.	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	A
02	天和屋	天6	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	乙	乙	甲	乙	乙	甲	乙	乙
03	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
04	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
05	天和屋	天12	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
06	天和屋	天6	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
07	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
08	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
09	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
10	天和屋	天4	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
11	天和屋	天12	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
12	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
13	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
14	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
15	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
16	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
17	天和屋	天180	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
18	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
19	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
20	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
21	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
22	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
23	天和屋	天12	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
24	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
25	天和屋	天4	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
26	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
27	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
28	天和屋	天12	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
29	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
30	天和屋	天12	甲	甲	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
31	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
32	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
33	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
34	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
35	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
36	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
37	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
38	天和屋	天6	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
39	天和屋	天12	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙